

第百十八回 楽々俳句会(ちば)

令和七年四月十日(木) 晴

会場 活動センター 十時集合

兼題 「沈丁花」

久武 1 3 余生とはいつも普段着沈丁花

育子

武久 1 咲くたび偲ぶ人あり紫木蓮

育子

武久 2 沈丁や障子閉ざせり堀田邸

粹歩

類似句で左がある。内容的にも類似している

沈丁や障子閉せる中宮寺 大久保橙青

久 2 夫と来てやがて無言の花の下

洋子

武久 1 1 馥郁と主亡き家沈丁花

成子

武久 2 丸刈りす入部を決める入学子

恵美子

武久 3 沈丁の香彷徨う路地に縄暖簾

信雄

久 2 1 迫り出しの満開さくら水鏡

宣子

さくら満開水鏡

武 1 1 園児待つママたちの香や沈丁花

久登

久 1 1 瞑想の臉透きたる春の光

恵美子

瞑想の臉春光透けにけり

春の光の字余りでリズムが狂う

武 1 在りし日を忘れ行く夫花の下

宣子

1 輪になりてシベリア行きの帰雁かな

静代

春眠や何処か遠くで妻の声

粹歩

老木のどっこい生きる胴吹き桜

豊隆

1 2 沈丁の香いざないひぬ奥の院

恵美子

2 つくばいの黙にさ迷ふ沈丁花

武彦

2 白き手の招く新町花明かり

粹歩

2 地味な殻割りてほころぶ沈丁花

武彦

2 沈丁の香左へランドセル

久登

いちろ

2 廃屋の一縷を点す沈丁花

武彦

1 特急の桜散らして上総路へ

成子

1 街路樹となりて満開花水木

洋子

1 理髪店香る鏡か沈丁花

信雄

1 チューリップ揺らすスキップランドセル成子

1 沈丁花此の世彼の世は続きたり

育子

春爛漫見渡す限り花はな花

一回り見渡す限り桜かな

行き摩りのマダムの香沈丁花

沈丁花信号変はるマダムの香

沈丁香今朝も連れ行く三千歩

沈丁香今朝も連れ行く歩数計

連翹は星国からの贈りもの

連翹や星の国から届くかな

長旅の土産どつさり蒙古風

蒙古風太平洋に落ちつけり

足を止め匂ひに顔寄せ沈丁花

母娘して顔寄せ合ふや沈丁花

雨あがり桜が映える青い空

雨あがり桜の詰る青き空

まどろみ

微睡し夕餉の後の沈丁花

まどろみ

微睡し夕餉の後や沈丁香

風光るオレンジ号行くガタゴトン

3月号でこの句新幹線の路線点検イエロー号と勘違いしていました。

この句は八代から出ている肥薩オレンジ鉄道の事でした。

ローカル線なのでガタゴトンの表現が正しのかも知れません

参加者 成子・育子・静代・恵美子・宣子・洋子

豊隆・粹歩・武彦

投句 ・久登 欠席 ミチ子・弘子・利太郎・今日子

次回予定

五月八日 (木)

十時活動センター

兼題 「南風」

六月五日 (木)

九時千葉みなと駅

十時ポートタワー広場休息所

七月十日 (木)

十時活動センター

兼題 「入道雲」